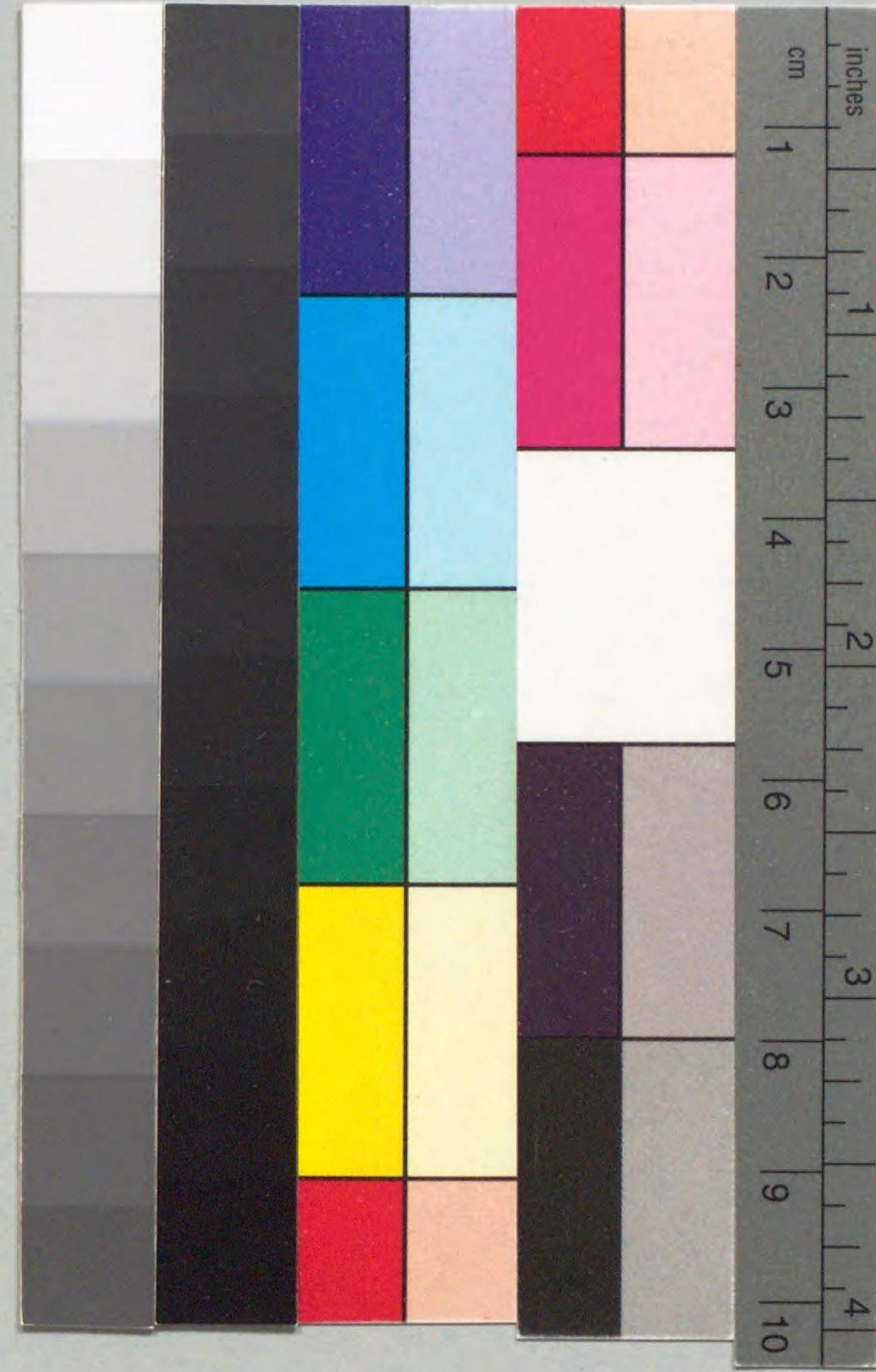


KH397-H191

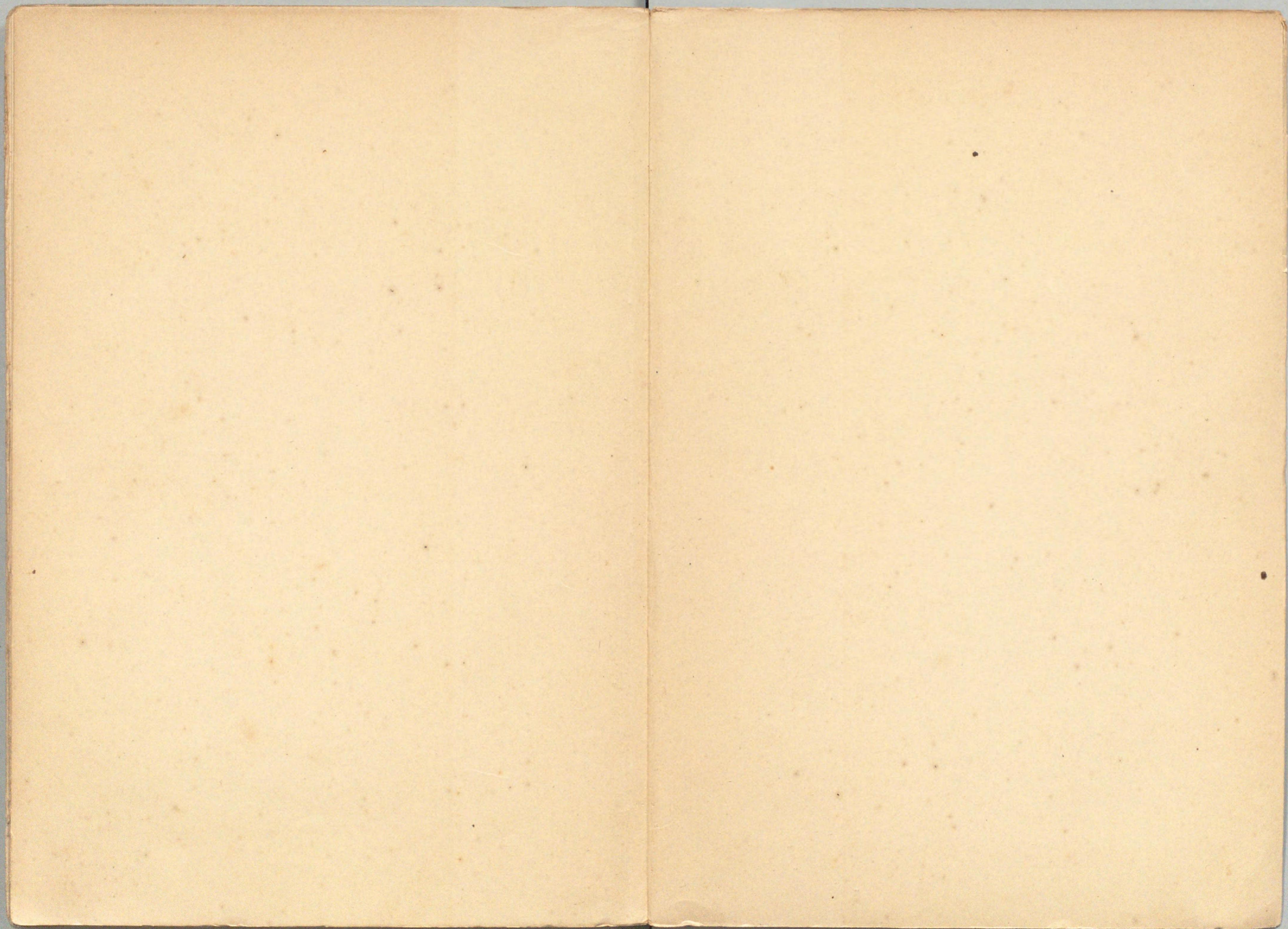


\*1200601311636\*

大戦の詩









大  
戦  
の  
詩



KH397  
H191

渡洋爆撃

孟秋八月月明の夜

飛艦海をわたつて大陸を襲ふ

江南江北百千の城

隨所に粉碎して曉旦におよぶ

吳楚閩越眼下に過ぐ

四千年一夢のごとし


 I 種  
 W  
  
 \*1200601311636\*



青天を負ひ扶搖に搏ち

鵬翼をつらねて日本に歸る

昭和一三二一五

## 大行山

大行峻嶺のうち

忽ち敵の重圍におつ

鳩を放つて急を告ぐれども

援軍いまだ到らず

晝は屍を負ひて進み

夜は寒巖に臥す



彈丸盡きては石を擲ち

饑渴しては雨をうけてすする

苦闘十幾日

困憊ここに極まる

千古長壁のほとり

誓つて護國の鬼とならん

昭和一三、一〇、四

## 行軍

行けどもゆけどもはてしがない

高粱畑の一本道

どこまでも どこまでも どこまでも

戦場が逃げてゆくやうだ

大陸の暑熱

大陸の土ほこり



大陸の單調

大陸の倦怠

くひ込む負ひ革の痛み

焼けほてる丸たん棒の足

汗もつきた

唾もかわいた

うつろな目

からからの唇

火のやうな顔

割れさうな頭

ころがつてる死骸

臭氣

血 血 血

きのふの戦の生き残りが

黄塵のなかを影みたいにゆく

ちきしやう はやく敵が出てくれれば！

水がほしい 水がほしい

馬だけがうまさうに泥水をのんでる



ああ　これが人間か  
おら馬になりてえ

昭和一三、一〇、一〇

襲へ　襲へ

保定城外いくさのあとを  
ひきおくれたる敵の砲  
おそへ　おそへ」  
さきは中隊こちらは四騎よ  
いでやこんじよの思ひ出に  
おそへ　おそへ」



ひとつうたれりやけし飛ぶ體

命かけたるまつしぐら

おそへ おそへ」

四騎で分捕る大砲四門

笑うてかへる男まへ

おそへ おそへ」

昭和一三七七

綏 遠

渺茫たる綏遠の野

十里敵騎を圍む

巨砲齊しく發して

人馬共に飛碎す」

飄飄たる朔北の風

濛濛として黄沙あがる



ここに宿敵を殲滅して

旌旗歸化城に入る」

無邊大陸の夜

燄燄として兵火のぼる

昭君悲歌の地

夢に追ふ馬占山」

昭和一三、一〇、三

## 大陸封鎖

これは大陸封鎖の船よ

鷗ばかりが沖の友

ポツカリコ ポツカリコ」

まじらまじらと海みてくらす

うたぬ大砲なでくらす

ポツカリコ ポツカリコ」



風にもまれて潮をあびて

ひとり濡れるも君のため

ポツカリコ ポツカリコ

波にゆられて照りつけられて

焦れ死ぬのも君のため

ポツカリコ ポツカリコ

見張る海岸幾千海里

ジャンクひとつも通しやせぬ

ポツカリコ ポツカリコ

昭和一三、九、二一

山西

あしたに一壘を屠り

ゆふべに一城を抜く

急戦残兵まれに

嶮壁糧道絶ゆ

家郷三千里

生死一瞬のまへ



蕭蕭として峡谷をわたれば  
弦月長城に落つ

昭和一二、九二二

## 白水村

白水村の戦ひに  
敵前に擱坐して燃えあがる戦車  
車外に右手を傷ついで殪れた兵士  
左手で書いた遺言

「天皇陛下萬歳」

豊田隆



隆は今から死にます  
お母さん御機嫌 ㄥ

昭和一三、一〇、五

斃馬

命を的の戦ひは  
人と獣のへだてをなくした  
鐵火飛びかふ戦場に  
鬚むしやの荒くれ男が  
斃馬の頸にだきついて  
おいおいと泣いてゐる

昭和一三、九、二二



トーチカ

突撃の機は熟した

小銃

機關銃

迫撃砲彈の雨のなかに

張りわたされる煙幕

ざぶざぶとクリークに飛びこみ

死びと臭い水に首までつかつて

肩から肩へと板をかつぎ

人橋をかける裸の工兵

なかにはうたれて流れてゆく

「歩兵さんのむよー」

煙幕にかすんで亡靈のやうに

三途の川の一本橋をかけわたつて

地獄の釜にとび入る歩兵

對岸に火を吐くトーチカ、トーチカ



トーチカに投げこむ手榴弾

撲殺

刺殺

斬殺

悲鳴

呻吟

血

幾十幾百のトーチカの

ひとつひとつが地獄の釜

昭和一三五、二八

### 敵前架橋

上海戦線から

ほやほやの電送写真

弾丸の雨とふる

蘇州河の敵前架橋

素裸の三十幾人

工兵隊の萬歳



ある者は嬉しさに

ある者は苦しさに

ある者はほけたやうに

ある者はべそをかいて

手をあげ口をあいてゐる

「たつた今出来たところだ

見てくれ歩兵が渡つていく」

さういつて指さしながら

たうとう泣き出したさうな

でかしたぞ禿ちやん

頼むぞ髭のおつさん

見てくれ歩兵が渡つていく！

わしも貫ひ泣きしたぞ

これこそ死線をこえた

眞實赤裸裸の萬歳



ポンポン船

これは御國のポンポン船よ

支那の海川股にかけ

ポン　ポン」

運ぶ兵隊命が的よ

敵の彈丸なんのその

ポン　ポン」

かたい體は赤銅づくり

敵の彈丸なんのその

ポン　ポン」

かぢきとりにも棄てたる命

君のためならなんのその

ポン　ポン」

昭和一三、九二一



蜜柑

太原攻略にむかふ隊と  
前線から送られる傷兵の一團が  
たまたま岱岳鎮で行きあつた  
ひとりのまだ達者な兵士が  
ひとりの重傷の兵士に  
それは死との格闘にうち負け

蒼ざめて  
片輪になつて  
血に濡れて  
痛みをこらへて  
齒をくひしばつて  
五體をふるはせて  
車のうへにのびてゐる兵士に  
もつてる蜜柑の罐詰をわけた  
傷兵は嬉し涙を流しながら



やつとの思ひでいつた

自分はもうだめなのだ

あなた方も今のうちたべないと

いつたべられなくなるかしれない

だから自分はいらない

五體のそろつた兵士は貫ひ泣きしながら

反對の方向へ別れていつた

今度は自分が不死身の死と格闘するため

昭和一三、八、四

### 光華門

昭和十二年十二月

十日午後五時二十分

南京光華門のさきがけに

山際葛野の決死隊

すは城頭の日の旗

「おれも行くぞ皆つづけ」



伊藤少佐はまつしぐら

城門に突き入れば

杉山少尉村田軍曹

その他の部下もあとにつく

待ちかまへたる敵兵は

それとばかり一齊に

手榴弾の雨をふらせば

心はやたけにはやれども

部隊は堰かれて進み得ず

城壁の外には

炸裂の嵐と人波と

押しつ押しされつ寄せかへす

城壁の上には

夕闇に踊り狂ふ死神

手榴弾

手榴弾

手榴弾

つぎつぎに倒れる兵



けし飛ぶ兵

「しつかりしろ おれもあとからいくぞ」

手近のひとりをだき起して

煙のなかに呼はる聲

炸裂

炸裂

炸裂

阿鼻叫喚

地獄の點呼

「葛野中尉はゐるか

山際少尉はゐるか

杉山少尉はゐるか

村田軍曹はゐるか

皆ゐるな

それでよろしい」

炸裂

炸裂

炸裂



彈丸缺乏

苦戰惡闘

部隊へ傳令

田端一等兵

「必ず目的を達してくれ 頼むぞ」

聲をかざりに叫ぶ

月あかりの走り書き

血染めの紙片

……部下とともに死を覺悟してゐる

全員光華門を死守せよ……

總身あけに染みたる少佐の

頭部にまたもや手榴彈

どうと後へに倒れつつ

死守 死守 の聲も絶えだえに

死闘六十時間

光華門の露とちりぬ

傳令は見事に使命をはたし

部隊長より祝ひの神酒を携へて



ふたたび城門に駆けいる刹那

おなじさだめの手榴弾に斃れぬ

戦ひ過ぎし十五日

風腥き新戦場

少佐の遺骨のまへに

供へられし神酒

血まみれの水筒

泣かぬものはなかりけり

ほめたたへよ人びと

語りつたへよ人びと

胸にきざめ人びと

涙をおくれ人びと

あつばれ南京城の一番のり

伊藤善光少佐



茶 毘

南京城の城壁のほとりに

戦歿將士の茶毘

武装せる僧兵の合掌

聲すむ陀羅尼

悲しきラッパの音

戦友の禮拜

たき木は燃えあがり

煙は渦まきのぼる

あはれ耀かしき勝利の塔の下には

常にこれらのさびしき人柱！



白 骨

八月大海をこえ

白雲をついて南京を襲ふ

一機火を發し

別れを告げつつ敵陣に落つ

南京すでに取らる

死別半歳

城外枯草のうち  
黙黙として白骨をひろふ

昭和二三、八、一二



南京

古都南京

悠久二千年

歴史の大海

興亡の波

石人よ語れ

後代の人に

一九三七年

東洋の平和と繁榮を齎すべく

旭日の旗をおしたてて

日本人ここに來り戦へりと

昭和一三、三、一



錢塘江

霧にまぎれてけなげにも

錢塘江をおし渡り

襲ひきたつた敵六十

そのまんなかへただひとり

斬り込む男の肝つ魂

逃げるを追つて川のなか

國のためなら進むより

ほかに手はない一本抜き

敵船に泳ぎつき

四人の兵を薙ぎ倒し

残るひとりを捕虜にして

船もろともに機關銃

とつて歸つた特務兵

太田武男は九州男兒

川内部隊の譽れぞと



將兵堵列のまんまへで

由緒の佩刀隊長より

もらつてあげる男まへ

きく者は皆舌をまく

豪膽無比の物語

昭和一三七一七

### 地獄風呂

泥んこまみれの兵隊さん

戦ひすんだ夕まぐれ

けふはひと風呂あびようと

手ごろな水甕しよつてきた

うんせ うんせ」

木蔭にすゑて火をたいて



溝川の水汲みこんで

どんぶりつかる地獄風呂

極楽風呂とはどうぢやいな

うんせ うんせ」

ひよいと見つけた胴なかに

南無阿彌陀佛のほとけさん

通りがかりの百姓に

きけば死びとの甕だつた

うんせ うんせ」

昭和一三、八、三

### 黄河だぞ

征戦幾百里

北支の山野を席卷して

朔風のごとく南下する

皇軍將士の思ひ

黄河へ 黄河へ」

長城を破り



連峰をこえ

泥海をわたり

市城を落し

海潮のごとくに南下する

皇軍將士の思ひ

黄河へ 黄河へ」

百萬の敵を撃破して

終に黄河に達しぬ

ああ」

黄河！ 黄河！

戦友の遺骨をささげて

あふるる涙にむせびつつ

その河の汀にたちて

生ける人にもいふごとく

おい戦友 黄河だぞ！」



荒鷲

けふのよき日を漢口の  
敵の荒肝ひしがんと  
翼つらねてきほひゆく  
海の荒鷲五十機よ  
刃むかふ敵の八十機  
五十一機を撃ち落し

爆煙あとに揚揚と  
歸る姿の勇しや  
勝つて歸る旋回の  
外側の小隊  
すこし遅れしそのとき  
それと襲ひかかる  
待機の敵戦闘機  
餌をねらふ屍鳥の群  
追ひすがる六つと



渡りあふ松野機

武運拙くも

とある湖水にまつ倒

あとの白波にのこる

一抹の黒煙

山口機の油槽を貫く

呪ひの高角砲弾

もの凄き爆音

吐きだす火焰

なほも射撃をつづけつつ

今はこれまでと

僚機によりそひ兵曹は

訣別の手をふる

操縦の布田兵曹の肩ごしに

おなじく手をふる白石航空兵

とみるや機體はまつ二つ

武昌あたりへ落ちてゆく

残る一つの作間機に



集中する敵弾

負傷

戦死

血の船

油の船

つまる呼吸

うちつくす機銃

斃るる金原航空兵

せめても合掌させる

重傷の小松兵曹

筆談

手負ひの鷺のたどたと

からくも基地に歸りつく

荒鷺と

たがよびそめしひさかたの

空より散るか櫻花

香やはかくるる清き名は

揚子の川の絶えせず



よろづ世までも流るらん」

昭和一三、六、二四

徐州

皇軍怒濤のごとく

齊しく隴海に迫る

徐州五十萬

蒼惶堅壘を棄つ

遁逃また遁逃

東西に彷徨し



潰亂また潰亂

南北に奔竄す

茫茫たる淮北の野

漠漠として戰塵起る

輕騎を放つて敗敵を追へば

千里雲烟に入る

昭和一三、五、二二

聖 戰

山西の連峰はこえたり

綏遠の平野は清めたり

聖戰百萬の師

河をわたり

江をわたつて

敵を雲南に追はん



萬里の長城はこえたり

居庸雁門は破りたり

聖戰百萬の師

河をわたり

江をわたつて

敵を雲南に追はん」

北支の泥海はこえたり

南京徐州は落したり

聖戰百萬の師

河をわたり

江をわたつて

敵を雲南に追はん」

雲南に追ひ

昆明に圍み

もつて五億の民を安んせん」



神輿

やまと島根はわれらがみこし

七千萬人昇きあげる

ワツシヨイ ワツシヨイ

海をわたるは清めの神事

四百餘州をねりまはす

ワツシヨイ ワツシヨイ

出たとなつたら血をみにややまぬ

いつの荒神あら祭

ワツシヨイ ワツシヨイ

昭和一三、一〇、一二



開封

開封城の攻撃に

まつ先かけし發煙班

敵彈の雨霰

前進

前進

城壁

煙幕

班長友部上等兵

效果を確めんと大膽にも

ひとり城壁に攀ちのぼる

ところを壁上からねらはれて

飛びくる敵彈

昏倒

部隊は

吶喊



呐喊

梯子

手榴彈

白兵戰

開封城はとられたり

高くかかぐる日の旗

ふと見れば壁下に

あけに染みて倒れし班長

戦友とびおりだき起し

「傷は浅いぞ」

蒼白

「手帳」

そして血みどろの手帳に

最後の言葉

笑つて死なう！

昭和二三、六、二六



リュシコフ

大雨の夜はすぎぬ

昭和十三年六月十三日

琿春の東のかた

滿ソ國境のあたり

明けそむる霧のなかを

蹠跟とさまよひくる白人

國境の警士に見出され

ピストルを棄てて逮捕されぬ

これこそ極東ゲーペーウーの長官

リュシコフ・ゲンリツヒ・サモイロウイッチ

さかしまにわが身にふりかかる

肅正の血の雨をのがれて

おのれは日本に

妻子はポーランドへ

東西千里



別れわかれに安住の地を求めつ

革命十八年

泣く子も黙るゲーペーウーの長官として

人を死刑すること年に五千人

今や五千一番めの順番の時において

いかにリュシコフよ

おんみはじめて知れりや

生きたる人間の世界においては

よしや百人のツアーを廢すとも

よしやソヴィエト聯邦の強大をもつてするとも

機構の改革も

五年計畫も

スタハーノフ運動も

テロリズムも

實に生きたる人間の世界においては

愛なく信なきところに

平和と幸福を齎し得ざることを



張鼓峰

一

張鼓峰

暗雲低迷す

東西危機を孕む

國運一にここにかかる」

驕露戦ひを挑めども

滿を持していまだ發せず  
一舉バイカルに達せん  
鬱勃として天際を望む」  
巨弾雨のごとくにくだり  
塹壕血河流る  
濛濛たる爆煙のうち  
恨をのむ護國の鬼



ソヴェエト人よ

三十幾年前

われらは爾靈山のとりあひに

屍で山の形をかへた

それもまだきのふのやうな氣がする

望みとあらば今度はひとつ

國境のいい目じるしに

張鼓峰を血で塗りつぶさうぢやないか

昭和一三八、一一



大宗庄

大宗庄へはひつた十三人の偵察隊

なにもゐないといふ支那人の案内で

危く陥つた敵の畏

五十をこえる紅槍會匪が

喚き叫んで突きかかる

格闘 格闘 格闘

多勢に無勢の苦戦のなかに  
ひとりの兵が輕機をとつて  
右へ左へ將棋倒し

無慘にふりかかる青龍刀の雨

満身創痍血みどろになつて

薙ぎ倒した敵二十いくつ

組みつく奴をふり拂つて

輕機のうへに倒れて死んだ

敵は全滅息つく十二人



残る一人が花と散つた

昭和一三、一〇、一三

### 飯塚部隊長

屍臭にみちた江南の戦場を

雷獣みたいに荒れまはつて

敵の膽を冷したわれらの部隊長

阜寧城にむかつて猪みたいに駆けのぼり

刃むかふ敵を牙にかけて

徐州を慄へさせたわれらの部隊長



鄱陽湖畔に屏風立ちする

山また山にまつ先かけて

裸で攻めあがつたわれらの部隊長

畑で掘つた里芋の味噌汁を

子供みたいに大喜びで

またつくつてくれといつたわれらの部隊長

兵隊の下手くそを笑ひながら

手づから醤油樽に繩をかけて

よいしよとしよはせたわれらの部隊長

間もなく敵情視察中

プスンと一發くづほれて

それなり死んだわれらの部隊長

あんなに元氣な部隊長

あんなに慕はれた部隊長が

漢口攻略を前にして

あへなくひよいと死んでしまった

これが壽命だ

これが戦争だ



われらの飯塚部隊長

昭和一三、九、二〇

さつま芋

江南の戦線に

ふたたびみゆる稲の穂

百姓は離散して

たわわにくちてゆく

わが兵はそれを見て

國の出来秋を思ひ出す



一家總出で刈りとつて

束ねて歸る喜びを

「萬歲 萬歲 で送られたが

もう一年になつたなあ」

揚子江の川ぞひに

戦ひのぼる春や秋

山をこえ谷をこえ

めざす漢口三十里

戦場のならひとて

あすの命もありやなし

佛になつた戦友に

心ばかりの供へ物

小休みの木のもとに

畑でほつたさつま芋

焼いたをひとつころがして

つぎの戦場へ急ぎゆく



水 牛

君のためなら敵地の野べを  
慣れぬ水牛ひいてゆく

漫漫的」

前で綱ひく後ろでたたく  
つるべ落しに日が暮れる

漫漫的」

せなにだいじな荷をつけながら  
水をみさいすりやあびくさる

漫漫的」

戦友おもへば日本男兒  
牛にひかれて修羅場ゆき

漫漫的」

昭和一三、一〇、一一



竹槍隊

かげんもんだよ竹槍隊は  
敵を突くにもこつがいる  
弱きやとほらず強けりや折れる  
生きる死ぬるのあひを突く

昭和一三、一〇、一四

通信兵

電話架設の通信兵五人  
部隊をはなれて前線へ  
とたんに出あつた敵五十  
小勢と侮り攻めかかる  
畜生 邪魔されてたまるか  
銃がないので短剣で突き殺す



グサリ グサリ

十五人やつけて二人死んだ

すごいぞ 通信兵

昭和一三、一〇、一三

廣東へ 廣東へ

往生ぎはのわるい敵の息の音をとめようと

大亞に上陸してめちやめちやに進撃する

夜を日についで無二無三

淡水

惠州

博羅



増城

廣東へ

廣東へ

やれ やれー

昭和一三、一〇、二〇

大戦

河北

敵を追ひて黄河に達し

流をこえて潼關を碎く

洛陽ために色を失ひ

西安の共匪怖る



江北

皇軍大別山をこえ

湖北の野に殺到す

秋風武漢の邊

煌煌として將星墮つ

長江

長江三百里

朦朧戦ひかつ遡る  
敵膽に匕首を擬す  
古今未曾有

江南

江南八十峰

硝煙山巔を黒む

死闘百萬の兵

鄱陽紅波をあぐ



廣 東

艦隊南海を壓し

精兵大亞を襲ふ

敵國震撼

守將旗を卷いて走る

漢 口

蜿蜒長蛇の陣

首尾漸くせまる

紫電霹靂

一舉三鎮を呑む



漢口

支那の漢口は日本の港  
波に照りそふ日の御旗  
出船千艘入船萬艘  
しかも日本の唄でゆく  
波止場はとばに賑ふ荷役  
しかも日本の唄でゆく

昭和一三、一〇、一五

短歌

北支那の荒野の草木なびきふす朝日の旗の旗風ほーい  
古より音にきこえし居庸關いまぞおしとほる太陽の子ら  
百萬の敵を碎くと雲迷ふからの荒野に戦車驅り走す



百人斬りけふとげぬれどあすはまた撫で斬りせんと劍とぎをり

104

一百里鶴翼の陣ひたおしに武漢三鎮を攻めとらんとす

漢口をただにとらんを軍神揚子江をさかしまに流せ

大陸の修羅の巷は燃えさかる廢墟の火より秋やたつらん



昭和十三年十二月二十日印 刷 大戦の詩  
昭和十三年十二月二十三日第一刷發行 定價六拾錢

版權  
所有

著者 中 勘 助

發行者 岩 波 茂 雄

精興社印刷

發行所

東京市神田區  
一ツ橋二ノ三

岩波書店

電話九段〇一八七番  
振替東京二六二四〇番







